前秦王苻堅に対する釈道安の諫言について

多田　修

序

前秦王・苻堅は三七六年に前涼を滅ぼして華北を統一し、天下統一を目指し東晋への遠征を企てた。群臣や道安(三一二～三八五)がそれに反対したものの苻堅は強行し、淝水の戦い(三八三年)に敗れた。この時の道安の諫言が、仏教の教義にもとづくものでないことは、既に指摘されている。(1) しかし、その理由についての考察は、管見では確認できない。そこで、東晋との戦いに道安が反対した理由とその論拠について検討する。

一　道安から苻堅への諫言の内容

道安が苻堅に、東晋遠征を実施しないよう申し入れたことは、いくつかの史料に見える。そのうち、『出三蔵記集』『高僧伝』『晋書』が主要なものと思われる。そこには、以下のように記される。

『出三蔵記集』巻一五

初堅、承二石氏之乱一至レ是民戸殷富四方略定。唯有三東南一隅未レ能二抗服一。堅、毎下与二侍臣一談話上未戊嘗不丁欲レ平二一江左一欲丙以二晋帝一為二僕射一謝安為乙侍中甲。堅弟平陽公融及朝臣石越原紹、並切諫終不レ能レ廻。紹以三安為レ堅所二敬信一乃共請曰「主上将レ有レ事二東南一。公、何能不レ為二蒼生故一言一耶」。会、堅、出二東苑一命レ安昇レ輦同載。…(中略)…俄而顧謂二安公一曰「朕、将下与レ公南遊二呉越一整二六師一而巡狩陟二会稽一而観中滄海上。不二亦楽一乎」。安、対曰「檀越応レ天御レ世有二八州之富一。居二中土一而制二四海一宜下棲二神無為一与二堯・舜一比上レ隆。今欲下以二百萬之衆一求中厥田下下之土上。且東南地卑気厲。昔、舜・禹遊而不レ反。秦皇適而弗レ帰。以二貧道一観レ之非二愚心所一レ同也。平陽公懿戚、石越重臣。並謂二不可一、猶尚見レ拒。貧道軽浅言必不レ允既荷二厚遇一敢不レ尽レ誠耳」。堅曰「非レ為二地不レ広民不レ足レ治也。将下簡二天心一明中大運所上レ在耳。順レ時巡狩亦著二前典一。若二如来言一則帝王無二省レ方之文一乎」。安曰「若鑾駕必動可下暫幸二洛陽一抗レ威畜レ鋭伝中檄江南上。如其不レ服伐レ之未レ晩」。堅不レ従。遂遣二平陽公融等一精鋭二十五萬為二前鋒一、堅躬率二歩騎六十萬一到。頃晋遣二征虜将軍謝石・徐州刺史謝玄一

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

拒レ之。堅軍大崩。晋軍還逐レ北三十余里。死者相枕。融馬倒隕レ首。堅単騎而遁。如レ所レ諫焉。(2)

『高僧伝』巻五「釈道安」

初堅、承ニ石氏之乱一至レ是民戸殷富四方略定。東極ニ滄海一西併ニ亀茲一南苞ニ襄陽一北尽ニ沙漠一。唯建業一隅未レ能ニ抗伏一。堅、毎下与ニ侍臣一談話上未丁嘗不レ欲丙平ニ一江左一以ニ晋帝一為ニ僕射一謝安為乙侍中甲。堅弟平陽公融及朝臣石越原紹等、並切諫終不レ能レ廻。衆以三安為レ堅所ニ信敬一乃共請曰「主上将レ有レ事ニ東南一。公、何不レ能下為ニ蒼生一致中一言上耶」。会、堅、出ニ東苑一命レ安升レ輦同載。…（中略）…俄而顧謂レ安曰「朕、将下与レ公南遊ニ呉越一整ニ六師一而巡狩渉ニ会稽一以観中滄海上。不ニ亦楽一乎」。安、対曰「陛下応レ天御レ世、有ニ八州之貢富一。居ニ中土一而制ニ四海一、宜下棲ニ神無為一与ニ堯・舜一比上レ隆。今欲下以ニ百萬之師一求中厥田下下之上上。且東南区地、地卑気厲。昔、舜・禹遊而不レ反、秦皇適而不レ帰。以ニ貧道一観レ之、非ニ愚心所一レ同也。平陽公懿戚、石越重臣。並謂ニ不可一、猶尚見レ拒。貧道軽浅言必不レ允、既荷ニ厚遇一故尽ニ丹誠一耳」。堅曰「非レ為ニ地不一レ広民不一レ足レ治也。将下簡ニ天心一明中大運所上レ在耳。順レ時巡狩亦著ニ前典一。若ニ如来言一則帝王無ニ省レ方之文一乎」。安曰「若鑾駕必動可下先幸ニ洛陽一枕レ威蓄レ鋭伝中檄江南上。如其不レ服伐レ之未レ晩」。堅不レ従。遣ニ平陽公融等一精鋭二十五萬為ニ前鋒一堅躬率ニ歩騎六十萬一到。頃晋遣ニ征虜将軍謝石・徐州刺史謝玄一拒レ之。堅前軍大潰ニ於八公西一。晋軍逐レ北三十余里。死者相枕。融馬倒殞レ首。堅単騎而遁。如レ所レ諫焉。(3)

『晋書』巻一一四「載記一四　苻堅・下」

游ニ於東苑一、命ニ沙門道安同輦一。…（中略）…顧謂レ安曰「朕、将下与レ公南游ニ呉越一整ニ六師一而巡狩、謁ニ虞陵於疑嶺一、瞻ニ禹穴於会稽一、泛ニ長江一、臨中滄海上、不ニ亦楽一乎」。安曰「陛下応レ天御レ世、居ニ中土一而制ニ四維一。逍遥順レ時、以適ニ聖躬一、動則鳴ニ鑾清道一、止則神栖ニ無為一、端拱而化、与ニ堯・舜一比レ隆、何為下労レ身於馳レ騎、口倦ニ於経略一、櫛レ風沐レ雨、蒙レ塵野次上乎。且東南区区、地下気癘、虞舜游而不レ返、大禹適而弗レ帰、何足下以上労ニ神駕一、下困中蒼生上。詩云『恵ニ此中国一、以綏ニ四方一』。苟文徳足ニ以懐レ遠、可下不レ煩ニ寸兵一而坐賓中百越上」。堅曰「非レ為ニ地不レ広、人不レ足也。但思下混ニ一六合一、以済中蒼生上。天生ニ蒸庶一、樹ニ之君一者、所以除レ煩去レ乱。安得レ憚レ労。朕既大運所レ鍾、将下簡ニ天心一以行中天罰上。高辛有ニ熊泉之役一、唐堯有ニ丹水之師一、此皆著ニ之前典一。昭ニ之後王一。誠如ニ公言一、帝王無ニ省レ方之文一乎。且朕此行也、以レ義挙耳。使下流度衣冠之冑、還ニ其墟墳一、復中其桑梓上、止為ニ済レ難銓レ才、不レ欲ニ窮レ兵極一レ武」。安曰「若鑾駕必欲ニ親動一、猶不レ願三遠渉ニ江・淮一、可下暫幸ニ洛陽一、明授ニ勝略一、馳レ紙檄ニ於丹楊一、開中其改レ迷之路上。如其不レ庭、伐レ之可也」。堅不レ納。先レ是、群臣以三堅信ニ重道安一、請レ安曰「主上欲レ有レ事ニ於東南一、公、何不下為ニ蒼生一致中一言上也」。故安、因レ此而諫。(4)苻融及尚書原紹、石越等上ニ書面一諫前後数十、堅終不レ従。

苻堅の東晋遠征に道安が反対した理由と、それに対する苻堅の反論を要約すると、以下のようになる。

[道安が苻堅の遠征に反対した理由]

・すでに広大な領域を有している。

・東南の地は良いところではなく、舜、禹、秦の始皇帝も生還しなかった。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

・苻融（苻堅の弟）や重臣も反対している。（『出三蔵記集』『高僧伝』のみ記載）
・遠征は国力を疲弊させることになり、徳をもってすれば武力を用いることなく従わせることができる。その際、『詩経』(5)を引用する。（『晋書』のみ記載）

[苻堅による反論]

・土地や国民が不足しているのではなく、天の心や運気を明らかにするためである。
・今回の遠征は天下を統一して民を救うためであり、労は厭わない。しかもこれは、江南へ流れた高官たちを故郷へ帰し、困難から救って任用するための義挙である。戦争を欲しているのではない。(6)（『晋書』のみ記載）
・嚳（高辛）・堯の戦いは古典に見える。（『晋書』のみ記載）
・時機にしたがって巡狩（帝王が諸国を視察すること）するのは古典(7)にあらわれている。仏の言葉には帝王が国を視察することはないのか。（『出三蔵記集』『高僧伝』のみ記載。『晋書』では「如来の言」ではなく「公の言」と記す）

これらによる限り、道安は仏典を引用していない。

二　仏図澄による石勒・石虎への諫言

道安による苻堅への諫言は、道安の師である仏図澄（二三二～三四八）による後趙王・石勒そして石虎への諫言に類似することが指摘されている。(8)

『高僧伝』巻九「竺仏図澄」

澄因而諫曰。「夫王者徳化洽二於宇内一、則四霊表レ瑞。政弊道消則彗孛見二於上一。恒象著見休咎随行。斯迺古今之常徴、天人之明誡」。勒、甚悦レ之。凡応レ被レ誅余残、蒙二其益一者、十有二八九一。於レ是中州胡・晋、略皆奉レ仏。(9)

『高僧伝』巻九「竺仏図澄」

後晋軍出二淮泗一、隴比凡城皆被二侵逼一。三方告レ急、人情危擾。虎乃瞋曰、「吾之奉レ仏供レ僧。而更致二外寇一。仏無レ神矣」。澄明旦早入。虎以レ事問レ澄。澄因諫レ虎曰、「王過去世経レ為二大商主一。至二罽賓寺一、嘗供二大会一。中有二六十羅漢一。吾此微身亦預二斯会一。時得道人謂レ吾曰、『此主人命尽当下受二鶏身一後王中晋地上』。今王為レ王、豈非レ福耶。疆場軍寇国之常耳。何為怨二謗三宝一夜興二毒念一乎」。虎迺信悟跪而謝焉。虎常問レ澄、「仏法云何」。澄曰、「仏法不レ殺」。「朕為二天下之主一。非二刑殺一無三以粛二清海内一」。既違レ戒殺生。雖二復事レ仏詎獲レ福耶」。澄曰、「帝王之事レ仏、当レ在下心体恭心順顕二暢三宝一不レ為二暴虐一不レ害中無辜上。至二於凶愚無頼一非二化所一レ遷。有レ罪不レ得レ不レ殺。有レ悪不レ得レ不レ刑。但当二殺レ可レ殺刑レ可レ刑耳。若暴虐恣意殺二害非レ罪、雖二復傾レ財事レ法無レ解二殃禍一。願陛下、省レ欲興レ慈、広及二一切一則仏教永隆福祚方遠」。虎雖レ不レ能二尽従一、而為レ益不レ少。(10)

仏図澄は石勒に対し、徳をもって治めることの利益を説く。そして、石虎が王である理由を輪廻によって示し、統治のあり方を仏教に結びつけて論じ、無辜の者を殺害することを戒めている。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

徳によって統治することを説くのは、先の道安の言葉と共通する。しかし、道安はそれを仏教と関連づけない。

三　小乗涅槃経の説と重臣の主張

道安が編纂した経典目録『綜理衆経目録』（『道安録』）は現存しないが、『出三蔵記集』に引用されている。その記述を手がかりとして、道安が参照し得た経典の中に、苻堅への諫言の根拠となるものがなかったか、検討する。

『出三蔵記集』の記述から、『道安録』に支謙訳の小乗涅槃経である『大般泥洹経』が掲載されていたことがわかる。

『出三蔵記集』巻二「新集経論録第一」

大般泥洹経二巻（安公云出長阿含祐案今長阿含与此異）

…（中略）…

右三十六部。四十八巻。魏文帝時。支謙以呉主孫権黄武初至孫亮建興中所訳出[11]

現存の失訳『般泥洹経』[12]または白法祖訳『仏般泥洹経』を支謙訳とする説がある。両者とも文言は似ており、阿闍世がヴァッジ（越祇）族を伐つのを釈尊が止めたと説く。その中で、釈尊は国が危機に遭わない七法を説き、これらを一つでも守っていれば、その国を攻めるべきではないと説く。その七法の概要は以下の通りである。

（1）政治を会議する。（2）君臣の和がある。（3）法に従って破らず、これを受け継ぐ。（4）礼と教化を謹み敬い、男女の別があり、長幼ともにつかえる。（5）父母に孝行し、目上の者に従い、教えを受ける。（6）天をいただき地に則り、社稷を敬い（『般泥洹経』では「鬼神に敬」）、常に奉って順う。（7）道徳を尊び、沙門・阿羅漢に供養する。

さて、道安による苻堅への諫言に先立ち、前秦の重臣の多くが東晋への遠征に反対したことが『晋書』に記される。

『晋書』巻一一四「載記一四　苻堅・下」

左僕射権翼進曰「臣、以為二晋未一レ可レ伐。夫以紂之無道、天下離レ心、八百諸侯不レ謀而至、武王猶曰二彼有一レ人焉、廻レ師止レ旆。三仁誅放、然後奮二戈牧野一。今晋道雖レ微、未レ聞レ喪レ徳、君臣和睦、上下同レ心。謝安、桓沖、江表偉才、可レ謂二晋有一レ人焉。臣聞師克在レ和、今晋和矣、未レ可レ図也」。…（中略）…越曰「臣聞、紂為二無道一、天下患レ之。夫差淫虐、孫晧昏暴、衆叛親離、所以敗也。今晋雖レ無レ徳、未レ有二斯罪一。深願厲レ兵積レ粟以待二天時一」。…（中略）…融曰「歳鎮在二斗牛一、呉越之福、不レ可二以伐一一也。晋主休明、朝臣用命、不レ可二以伐一二也。我数戦、兵疲将倦、有二憚レ敵之意一、不レ可二以伐一三也。諸言二不可一者、策之上也、願陛下納レ之」[13]。

ここには、重臣が遠征に反対した理由が述べられている。その中に、「君臣の和がある国を伐つべきではない」という思想が示される。これは、『仏般泥洹経』『般泥洹経』の説と通じる。前述の通り、道安は重臣の要請を受け、苻堅を説得しようとした。しかし道安は、苻堅に諫言する際に小乗涅槃経を用いない。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

結

道安が苻堅の東晋遠征を止めようとした際、根拠となる仏典などが当時存在したがそれを取り上げず（少なくとも明示せず）、むしろ儒教の思想などが見える。『晋書』は、苻堅（字は永固）が儒教にしたがって政務に勤めたと評する。

『晋書』巻一一五

史臣曰。…（中略）…永固雅量瓌姿。…（中略）…遵二明王之徳教一、闡二先聖之儒風一、撫二‐育黎元一、憂二‐勤庶政一。(14)

道安から苻堅への諫言に仏教ではなく儒教の思想が表れるのは、苻堅の統治下では儒教が政治の理念となっていたためと考えられる。

1 南部松雄「釈道安私見」（『龍谷史壇』五六・五七、昭和四一年）、任継愈『定本中国仏教史Ⅱ』（柏書房、平成六年）一九七頁
2 大正五五・一〇八下～一〇九上
3 大正五〇・三五三上～中
4 中華書局『晋書』第九冊二九一三～二九一四頁
5 『詩経』「大雅・生民之什・民労」（中華書局『十三経注疏（上）』五四八頁）
6 『呂氏春秋』巻二〇「召類」（中華書局『諸子集成』第六冊二六二頁）
7 『書経』「虞書・舜典」（中華書局『十三経注疏（上）』一二七～一二八頁）、『礼記』「王制」（中華書局『十三経注疏（上）』一三二七～一三二八頁）等
8 任継愈『定本中国仏教史Ⅱ』（柏書房、平成六年）一九七頁
9 大正五〇・三八三下
10 大正五〇・三八五上～中
11 大正五五・六下～七上
12 宇井伯寿「般泥洹経二巻の訳者は支謙か」（『訳経史研究』、岩波書店、昭和四六年）は、現存の失訳『般泥洹経』が支謙訳であると見る。岩松浅夫「涅槃経小本の翻訳者」（『印度学仏教学研究』二五―一、昭和五一年）は、白法祖訳『仏般泥洹経』を支謙訳と捉える。
13 中華書局『晋書』第九冊二九一二～二九一三頁
14 中華書局『晋書』第九冊二九五五～二九五六頁

〈キーワード〉釈道安、苻堅、高僧伝、出三蔵記集、綜理衆経目録（道安録）、小乗涅槃経

（教学伝道研究センター研究助手）

NII-Electronic Library Service